

1. そこでイエスは、またも心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」(11:38-40)
 - a. イエスが心を動かされた理由は、ラザロとその家族に対する愛によるものか、あるいは一部のユダヤ人たちの37節のような発言の結果、信仰よりも疑いが増したことに對して憤りを感じられていたか、ということであろう。
 - b. 言うまでもなく、神と共に歩むには信仰が重要である。信仰がなくては神を喜ばせることはできない(ヘブル11:6)。イエスのミニストリーにおいても信仰の足りなさが奇跡の妨げになったケースがある。おそらくイエスはこの家族を慰めるために来ていた人々の言葉が疑いの雰囲気を広げることになったので憤りを感じられていたのだろう。「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」というマルタの言葉の中にも疑いが垣間見える。
 - c. ラザロはおそらく病気で急に死んでしまったため通常の香油や没薬などを使わずに埋葬されたのであろう。死後四日が経ち、腐敗が始まっていた。どれも墓から出さないための理由になる。
 - d. しかし死人を蘇らせたり、私たちの人生に神の栄光があらわされるには、イエスは私たちに人に見られたくないもの、あるいは自分でも見たくないものを差し出すように求められることがある。ここではイエスはラザロを復活させるが、私たち一人ひとりのうちにもイエスが「復活」させたい部分がある。神の復活の力を見るには私たち側にも要求されるものがある。信仰/信頼、服従/信頼、神の栄光を見たいという意思/信頼。
2. そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです。」(11:41-42)
 - a. ここでマルタの従順な様子が見える。彼女はイエスとはそれ以上争わず石を取りのける。恥をかくような状況になりかねなかったが、彼女は石を動かせばあとはイエスがなんとかしてくださるだろうという確信があった。私たちにもつねに石を取りのけたり、床を上げたり、川に入ったり、つまり聖霊が働かれるためには私たち側も信仰のステップを踏み出すように神様は要求される。
 - b. 神様に従うということは、たとえそれがどんなに馬鹿げて見えようと、私たちが神様を信頼しているというあかしである。神様の御心に信頼することは神様に従う人生を歩むための必須条件である。逆にも私たちが神様に従っていなかったら神様の御心を信頼していないということである。
 - c. そしてイエスのご自身のためでなく周りの人々のために祈りをささげる。ご自分のことを自慢しているのではなく、祈りによって戦略的に信仰を増す雰囲気を作り上げたのである。この祈りの中でイエスはなんとおっしゃっているか。今までの祈りに応えてくださったこと。信仰を強め、今行っていることについてイエスに信頼するためには、過去の祈りに応えてくださった神様の真実さを思い起こすと良い。
3. そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなさったことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。しかし、そのうちの幾人かは、パリサイ人たちのところへ行って、イエスのなさったことを告げた。(11:43-46)
 - a. イエスの感謝の祈り(願いではない)、続いて命令の祈り、どちらも短い祈りであった。またそれは大声で言われた、特定の人に向けられた特定の命令であった。祈りの達人イエスのすばらしい栄光に満ちた祈りの内容を参考にすることも大切である。布をほどくように命令されたのは、解放の祈りだという説もある。
 - b. この奇蹟は間違いなくイエスを批判していた人々の不信感を消した。私たちの人生においても、イエスにゆだねれば私たちを通して神様の栄光があらわされ、まわりの人々の心に触れることができる。